

Title	中世期宗教文献に見られるモンゴル語の研究
Author(s)	パートル
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58790
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	バートル
本籍(国籍)	
学位の種類	博士(言語文化学)
学位記番号	甲第53号
学位授与年月日	平成17年9月28日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	中世期宗教文献に見られるモンゴル語の研究
論文審査委員	主査 教授 橋本 勝 副査 教授 藪 司郎 副査 教授 杉村 博文 副査 京都大学教授 庄垣内 正弘 副査 助教授 塩谷 茂樹

論文の内容要旨

第一章

第一章の序論は、1. 論点、目的、理由、結論、2. 論文の題目の選択と意義、3. 題目について、4. モンゴル仏教の影響力とその貢献、5. モンゴルの宗教文献研究の状況、6. 明宣徳六年京師木刻本經典集の概況、7. アルジャイ洞窟銘文、8. アルジャイ洞窟銘文研究の状況、9. 本論文の研究概況、などから構成されたものである。

モンゴル語の古典文語は、中世期の宗教文献言語を基盤に発生、発展し、形成されてきたものである。このような観点を論証するために筆者は、中世期の宗教文献におけるモンゴル語の文献資料を通読し、その代表的なものを選択、そしてそれらの比較を通じて総合的な研究を行ったものである。

モンゴル語の中世期宗教文献の主要なものは翻訳文献である。翻訳によって、モンゴルの社会に新しい世界観が生じ、モンゴル語やモンゴル文字、モンゴル人の思想・思惟に新しい考え方が続々と入ってきた。それによってモンゴル語には、新しい名詞や新しい概念が数多く増え、モンゴル語の言語システムに更新と変化を引き起こしながら、更にはモンゴル語の形態や文法、音韻システムにまで影響を及ぼしてきたのである。

言語とは、社会の発展のあり方を最も早く受け止め、映し出すものである。宗教教義がモンゴル人社会に与えた影響は、何よりもまずモンゴル語の中に反映された。この点の変化を研究することが、本稿の題目選択の主たる理由であるとともに目的でもある。

題目について、本稿の研究範囲を中世期としたのは、歴史的なモンゴル語研究領域における既存の複数ある分類説のいずれにも従ったものではない独自の概念である。ここでいう中世期とは、筆者の分析した資料の特徴とその資料に見られるモンゴル語の特質や、仏教がモンゴルで興隆した時代の特徴を総合的に考量して付けた名称である。時代的特徴としても、モンゴル語の中世期はモンゴル仏教の中盛期と合流している部分が何点もあるからである。

中世期モンゴル語宗教文献の研究概況

モンゴル宗教文献に関する研究作業は世界各地で行われている。文献の特徴から見ると、書かれた文字の違いにより、パスパ文字文献とウイグル式モンゴル文字文献という二種類に分けられる。この内、ウイグル式モンゴル文字の文献は、パスパ文字文献よりも数・量共に圧倒的に多い。よって、これまで総括して研究されたものはない。しかし、『回鶻式蒙古文献匯編』（道布、中国民族出版社、1983）、D. Cerensodnom, M. Taube, *Die Mongolica der Berliner Turfansammlung*, Akademie Verlag, Berlin, 1993、『阿爾寨石窟回鶻蒙古文榜題研究』（哈斯額爾敦、丹森 等著、遼寧民族出版社、1997）という三著を挙げれば、中世期モンゴル語の宗教文献の概況を理解することはできるものと思われる。

中・古代モンゴル語文献資料の研究は従来、パスパ文字もしくはウイグル式モンゴル文字の名の下で研究されたが、その大多数を占める宗教文献の宗教的特徴は軽視される傾向にあった。単に中世モンゴル語という問題意識を重視するだけで、宗教文献という特徴を軽視した立場から読み解かれた文献資料の、宗教的という本来の意味が解釈されなかった。そのことが、語義を正確に理解して研究を進める上で、大きな障害を残した。例えば、*amitan* という言葉の仏教分野での意味は「衆生」である。衆生とは六道衆生、具体的にいえば天、阿修羅、人、畜生、餓鬼、地獄、である。この衆生は、仏陀の慈悲の目的となる教化の対象である。こういう言葉を普通の語彙と区別せずに、*amitan urvumal-un amitan*（『善説宝蔵』ジョンナスト、スチンチョクト 校注、1989、p.421）「動物、植物の」と解釈するのは、宗教本来の意味から大きく外れてしまっているといえる。六道衆生の「人、畜生、餓鬼」は動物であるが、「天、阿修羅、地獄」は動物ではなからう。

本稿で宗教という二字を強調しているのは、宗教的な文献を宗教的な観点から研究しようという意図からである。そのようにすれば、その結果は最も合理的なものになると思われるからである。

明宣徳六年京師木刻本經典集

明宣徳六年京師木刻本經典集を、略して宣徳刻本とも称する。筆者は *sun tai* とモンゴル語で書いてきた慣わしをもとに、ST と略している。般若波羅蜜多心經、金剛般若波羅蜜多經、仏説阿彌陀經の漢文經文を、姚秦三蔵法師鳩摩羅什奉詔譯と書いてあるのを除けば、全經文の原作者や翻訳者、出版社についての詳しい情報は見つからない。ただ、刊行の目的は刊行者の記載した説明文で明確である。それは、福德資糧を集めて仏教を唱導させるために刻まれ発行したもの、という。刊行年は明宣徳六年、すなわち西暦紀元 1431 年である。經文の内容は、福德資糧を集めて仏教を唱導させるために印刷し、信仰者へ発行して、皇帝に恩を返すために刊行したものなので、その選んだ經文は大衆化した分り易いものである。明宣徳六年（1431）京師木刻本經典集には、ウイグル式モンゴル文字の文献が四種類収録されている。神咒、真言の部分、説明文の部分、五冠仏礼讚、聖救度仏母二十一種礼讚經等である。そしてその中には、神咒、真言が 59 項ある。単語と接尾辞をあわせると、550 前後の語彙単位が見られる非常に大きな文献資料である。単語の一部分は諸仏のモンゴル語の名称である。それらを除けばほとんどはサンスクリット語を転写したものとなる。この文献は、モンゴル語の音韻や正書法や外来語などを研究するに当たっては、非常に重要な資料といえる。真言を解釈することは非常に難しい作業であり、多くの時間を要する。真言の大部分はサンスクリット語起源のものであるので、今回はこの部分の研究は行わなかった。

説明文は二つある。説明文とは施主の言である。現代風に言えば出版社のことばに相当する。これらはいわゆる三枚ある。内容は、刊行した経文の目録、刊行した人の福德資糧の目的、最終に刊行した時期、を記している。仏教の教義と仏法の力を強調したのは、刊行者からの仏の教えを高揚させることに対する切実な心情を表したものである。

五冠仏の礼讃は、中世期宗教文献の中では最も珍しいものとなっている。これまでに発見されているのはただこれだけである。普通の読誦経典にもあまり含まれないので、後盛期においてもあまり目にしない。その内容は、初めにモンゴル語の冠名を呼び出して、つづいて仏の功德を述べ、それから仏法の特徴を挙げて、最後に帰命頂礼を表すものである。

聖救度仏母二十一種礼讃経は、二十一種といっても事実上は正天尊の一礼讃を含めて二十二種である。今までに発見された中世期の聖救度仏母二十一種礼讃経は二つある。そのもう一つは、アルジャイ洞窟の聖救度仏母二十一種礼讃である。この二つの礼讃を比べてみると保存状態は京師木刻本の礼讃が最も完全なものである。アルジャイ銘文のタラ菩薩の礼讃は二十四種ある。それは京師版礼讃の二十二種の上に総礼讃二種を加えたものである。しかし、アルジャイ銘文には破壊されてしまったものもあり、残っているものは十九種に過ぎない。そしてその十九種ある中でも、完璧なもの一つとして残っていない。二、三語しか残っていないものもある。こういった意味においても、京師版のタラ菩薩の礼讃は、最も貴重な資料となることは言うまでもない。

アルジャイ洞窟銘文

アルジャイとは、今の中国内蒙古自治区のオルドス市(前のイフ・ジョー・アイマグ(yeke juu aimav))のオトク旗(otuv qusivu)のアルバス・ソム(arbas sumu)にあるモンゴルの古代宗教遺跡である。山の岩を掘って洞窟を作ったもので、敦煌の様式と似ている。その洞窟の壁に仏像と経文を描いたものである。何百年にもおよぶ戦乱などの被害を経たため、残された仏像などはわずかである。その壁に描かれた銘文の経文を、アルジャイ洞窟銘文と称する。今までに発見されたものは、三十五仏礼讃、二十一タラ菩薩礼讃、十六羅漢礼讃、優婆塞ダルマ・タラ礼讃、四大天王の礼讃という仏教の文献である。それは仏教の読誦経文であるdūngsav(懺悔経)、rulm-a yin dudba(救度母礼讃)、naidan jürüg ki dudba(十六羅漢礼讃)を謄写したものである。

アルジャイ銘文の研究状況は、アルジャイ銘文研究グループの調査と考察から始まった。アルジャイ研究グループとは、中国中央民族大学ハスエルデニ教授の指導で成立した内モンゴル師範大学のガルデイ、エンヘバートル、バヤンバートルそして、内モンゴル大学のジャルサン、プリンバト、内モンゴル社会科学院のダンザン、バトジャルガルなどの連合研究グループを指す。そのグループは、1990年から1996年の間にアルジャイ銘文研究に関する論文を25編発表した。また研究報告会や専門テーマ別の学術討論会なども開催した。さらには国際学術討論会でも論文を発表するなどして、アルジャイ銘文を世間に紹介しながら研究を行ってきた。アルジャイ銘文研究の集大成は『阿爾寨石窟回鹘蒙古文榜題研究』(遼寧民族出版社、1997.6)である。アルジャイ銘文の研究手法は、まだ現段階で多く使われている考証学の方法を主に、文献学、言語学、歴史学、宗教学の知識を利用して比較研究を行っている。

研究成果については、瀕死に近い仏教遺産をある程度救うことができた点が最も重要なことであろう。

第二章

第二章では、明宣徳六年（1431）京師木刻本經典集の中に収録されているウイグル式モンゴル文字文献である五冠仏礼讃、聖救度仏母二十一種礼讃経などを読み、ラテン文字に転写し、翻字を行い、おおよその意味を日本語に翻訳して、語彙と宗教用語に注釈を施した。聖救度仏母二十一種礼讃経の日本語訳は、次の第三章の比較研究につけたのでここでは省略した。

Tc: ラテン文字転写

Tl: 翻字

Tm: 日本語訳

例)

1. 宝生王仏①への礼讃

Tc

- a. radn_a sambaw_a burqan masi gūn
- b. wēir ovtarvui-yin činar② gkir ūgei
- c. mōn činar arivun gegeken ilaqu ūgei
- d. wēir beye-tū-de③ mörgūn mavtamui

Tl

- a. RATN A SAMPAW A PWRQAN MASY QWYN
- b. VCYR WQTARQWY YYN CYNAR KKYR AWYKAY
- c. MWYN CYNAR AARYQWN KAKAKAN AYLAQW AWYKAY
- d. VCYR PAYA TW TA MWYRKWN MAQTAMWY

Tm

- a. 宝生王仏は甚に深妙である。
- b. 金剛の靈空性は汚れず
- c. 自性の清潔と光明に勝さらず
- d. 金剛の身者に叩頭礼讃

注:

- ① 五冠仏の一員。南方を所有し仏法を唱導する。普通は五冠仏の二番目となっている。しかし、五冠仏の順位はよく変わるため、固定的な地位がないものと見ている。

radn_a sambaw_a は、宝生王仏のサンスクリット語の名称のウイグル式モンゴル文字転写である。Radnasambuw_a と続け書きすることもある。モンゴル語には *erdini varqu-yin orun*、*erdini-eče varuvsan*、*erdini-eče varuvči*、*erdini-yi varvavči* という数多くの名称がある。サンスクリット語では *ratnasambhava*、*ratnakara* と称する。チベット語を転写して *rinjūng*、*rinčinjungnai* と書く。モンゴルの寺では、この仏は宝物で飾られ、椅子に座する。頭髪の色は青く巻いている。天物の着物を着て、広大な胸と右の腕を現して、右の手は聖施の印、左の手は禪定の印をして、金剛座で座る。黄色は宝生王仏の色である。五煩惱の傲慢と吝嗇を取り除く功德を備え、また事業を成功に導く。

- ② ovturvui-yin činar (空性) とは、ovturvui metü tegsi aqulaqui qovusun činar (空の様に平坦になる空性) である。仏教の教義では現実世界の一切の現象を「因縁和合」の仮像と考える。物事の本身には真実性がない。「無自性」の「空性」と考える。宝生王仏のその「空性」は、金剛の様に堅固なうえ、汚れなく清潔なものである。
- ③ この bey_e-tü は、前の第三行目の mön činar と連続して理解すること。そうすると mön činar arivun gegeken ilaqu ügei wëir bey_e-tü となる。その mön činar-un bey_e である。それは burqan-u qovusun činar-un ečüs-tü kürügšen ilvamjitai lavšan (仏の空性の彼岸に到達した普通より異なる尊体) である。ilaqu ügei とは、敵に負けない、敵が勝てない、という意味である。すなわち、仏となったことを指す。

第三章

第三章のアルジャイ銘文の比較研究では、アルジャイ銘文の三十五仏への礼讃、二十一タラ菩薩への礼讃、十六羅漢への礼讃、優婆塞ダルマ・タラへの礼讃、四大天王への礼讃を、それぞれの対応する礼讃と比較した。また、現代モンゴル語の一般語彙では使用しない言葉や、Aa では解釈しなかった部分、欠落している箇所などを中心に解釈した。銘文上の読み取れない単語や、読みにくい語を判読する際に、当該仏の名称や姿、功德などの特徴は、銘文を正しく理解する上で重要な意義を持つと考えるので、各仏の名称などを紹介した。

三十五仏礼讃の著者、訳者との関連資料の情報

三十五仏礼讃の著者、訳者はいまだに不明である。関係が緊密な qutuvtu vurban čovča kemegdekü yeke kölgen sudur が大蔵経に収録されていることと、大乘経と称することから、釈迦牟尼仏の著作ではないかという説もある。ツォンカパ大師(1357-1419) およびその二大弟子ジャルチャブ・ダルマリンチン (Jalčab Darmarinčin, 1364-1432)、ジャミヤン・チョルジ・ダシバルダン (Jamiyan Čorji Dasibaldan, 1352-1435) などの三十五仏の著作もある。モンゴル『大蔵経』の礼讃集の中にあるマディズダラ大師の vučin tabun saibar oduvsan-u nere-yin erdenis-iyer čimegsen mavtaval (三十五善逝者の名称の宝飾礼讃、筆者) は、アルジャイ銘文の礼讃と内容的によく似ている。しかし、原著は一致していない。それ以外にロブサンダンビニマ (Lubsandanbinima) の「三十五仏礼讃」、ジャンロン・バンディダ・アグワンロブサンダンビジャルサン (Janglung Bandida Avwanglubsangdambijalsan) の vucin tabun burqan-u aldar-un tusa erdem (三十五仏名称の功德、筆者) と vučin tabun burqan-u бүтүгекү арва-yin jang üile (三十五を創作する行事、筆者) という経文がある。三十五仏礼讃がモンゴル語に翻訳された年代と翻訳者については、今まで何の情報も得られていない。

アルジャイ洞窟三十五仏礼讃の現状

アルジャイ石窟群に当初から作られた石窟は 100 前後であった。今は痕跡だけを含めても 51 しか残っていない。その内、われわれの三回の調査で 19、26、30 と番号をつけた一つの石窟の中には銘文が描かれていた。その窟を普通は銘文窟と称する。アルジャイ銘文

はすべてその窟の中に描かれている。

三十五仏の礼讃は三十五仏が一つずつ礼讃されている。よって、アルジャイ洞窟にも三十五首詩あるはずである。アルジャイ洞窟には実際に三十五首詩あったが、四百年以上にわたって保護されなかったことにより、結果的に破壊の程度は非常に無残である。具体的に言えば、1990年代になると三十五首詩の内、残っているのは十八首詩だけである。その十八首詩も程度こそ違えみな破壊されており、ある詩は二、三語しか残っていない。

二十一タラ菩薩の礼讃

タラ菩薩の礼讃は、モンゴルの仏教界では最も流行した読誦経である。モンゴルで幅広く発行されたタラ菩薩の礼讃経は、いろいろな経名を持っている。その中で最も古くまた代表的な名称は、聖救度仏母二十一種礼讃経 (*qutuytu qorin nigen dara eke-yin mavtaval*) となる。収録されている礼讃詩の数から見ると、二十一、二十二、二十四首詩を含む経文の区別がある。二十二首礼讃の経文は、二十一種タラ菩薩の礼讃の上に正主尊の礼讃を加えたものである。二十四首礼讃の経文は、二十一タラ菩薩の礼讃と正主尊の礼讃の上に総礼讃二首を加えたものである。アルジャイ銘文は二十四首礼讃の経文である。そして印刷手段から見ると木刻本、手写本などの区別もある。

二十一タラ菩薩の礼讃の作者、翻訳者と関連資料の情報

『*bolur toli*』(水晶史)、『*dara eke-yin tailburi*』(タラ菩薩の解釈) などによれば、タラ菩薩の礼讃は、7世紀頃にインドの月官大師 (*Zandarakumi*) が著したものとされる。しかし、タラ菩薩誕生の時期については多くの説があるので、その修行と礼讃も無数あるといわれる。千から百八になって、百八から二十一になって、加工、創作の過程は一人二人の作品ではないものと思われる。聖救度仏母百八種は月官大師が創作したといえば、二十一救度仏母は秘密太陽師 (*nivuča naran bavsı*) が作成したものともいわれる。仏教の教義では、勝者の説法した (*ilavuvsan-u nomlavsan*) ということと大蔵経に収録されていることによって、釈迦牟尼仏と関係があるともいわれる。翻訳者については、後盛期の翻訳者は明白である。例えば、メルゲン・ゲゲン (*Mergen gegen*) 等である。中盛期の文献となるアルジャイ銘文と宣徳刻本の翻訳者は分っていない。

二十一救度仏母の礼讃は、モンゴルのラマたちの日常読誦経となっていたのでモンゴルの僧や俗民衆の中に広く流行した。まとめてみると礼讃 (*mavtaval*)、解釈 (*tailburi*)、行事 (*jang üile*) という三つの部分に分かれている。

アルジャイ銘文の聖救度仏母二十一種礼讃経の現状

アルジャイ洞窟に書かれた聖救度仏母二十一種礼讃経は、二十四首礼讃の経文本であるタラ菩薩の礼讃経の中でもっとも完全なものである。残念ながら現在洞窟に残っているのは総礼讃で二首、正主尊で一首、そして一番目のタラ菩薩奮訊度母への礼讃から十六番目の消毒度母への礼讃まで十六首、あわせて十九首の礼讃である。失われたのは十七番目の賜成就度母への礼讃、十八番目の消毒度母への礼讃、十九番目の消苦度母への礼讃、二十番目の明心吽音度母への礼讃、二十一番目の震撼三界度母への礼讃などである。

十六羅漢の礼讃

十六羅漢の礼讃はモンゴル語で *aqui sitügen-ü mavtaval* という。寺院の読誦経である。内容的には総礼讃詩十六首、十六羅漢への礼讃十六首、ダルマ・タラへの礼讃一首、四大天王への礼讃一首で構成されている。よって、十六羅漢ではなく、「十八羅漢」となっている。

十六羅漢の礼讃の作者、翻訳者および関連資料

十六羅漢は、釈迦牟尼の弟子たちであった実在した者たちであった。彼らは釈迦牟尼仏の弟子として仏教理論を広め、仏旨収集事業の大功労者らであった。十六羅漢は釈迦牟尼仏の弟子なので、十六羅漢への礼讃は釈迦牟尼仏とは関係がない。よって、大蔵経には収録されていない。釈迦牟尼仏が涅槃に入った八百年後に獅子国（今のスリランカ）に誕生した仏教大師難提蜜多羅著で、唐の玄奘大師が翻訳した『大阿羅漢難提蜜多羅所説法住記』は、十六羅漢を詳細に記述した古い経文である。モンゴルでは *arban jirvuvan yeke batuda avči-yin takil ilavuyšan-u šasin-u baravdal ügei čindamani kemegdekü orusiba*（十六羅漢の祭典勝者の仏法が尽きぬ如意法宝、筆者）という大バンデイダ・ビマス (Bimas) とグリグバ (Gligba) 著、国師チョイダンバ (Coidamba) の翻訳した経文、またゲンデンジャムス (Gendenjamsu) が著して、オラド・ダルマが翻訳した十六羅漢礼讃などが有名である。

アルジャイ銘文の十六羅漢への礼讃の現状

アルジャイ洞窟にはもともと、十六羅漢礼讃の経文中の総礼讃詩八首、十六羅漢への礼讃十六首、優婆塞ダルマ・タラへの礼讃一首、四大天王への礼讃一首あわせて二十六首詩が書かれていたことが確認された。現在では十三首詩しか残っていない。それは総礼讃の第一、二、三、四、七、八と、羅漢礼讃の第一、二、四、五、六、七、十、優婆塞ダルマ・タラへの礼讃一首、四大天王への礼讃一首、あわせて十五首礼讃である。

第四章

この章では、明宣徳六年（1431）京師木刻本經典集の蒙古文とアルジャイ洞窟銘文の蒙古文の音韻や文字と綴り字の特徴、また語法形態の特徴や語彙の特徴を簡単に説明した。

1. 音韻、文字と正字法の特徴

中世期のウイグル式モンゴル文字符号の表は、14 符号、17 符号、19 号符という色々な形式で作ることがある。実はその符号は、「A、W、Y」が母音符号、「P、Q、K、S、T、C、R」が子音符号、「l、r」が付加符号である。母音符号は三つ、子音符号は七つ、付加符号は二つ、合わせて十二である。モンゴル文字システムに晩期ごろ加えられた符号「・、:」は、ST では一度も使われておらず、Aa では *unin*、*jirüken*、*naran* という三つの言葉に「・」は三回だけ用いられている。また、「:」は *orusivsan*、*var*、*vaiqamsiv* という三つの言葉に三回のみ使われたが、Aa では子音 S の後ろに *šasin* という言葉で一例のみ見られる。

a、e、n、g、d、ng の語末の書き方は、原則として直立した形で書いた例は多いが、書く空間等の制約によって横に伸びる形で書いた例は ST に多い。これは中世期のウイグル式モンゴル文字の正書法的一大特徴といえる。基本的には元代のものが直立した形が主とな

っている。明代は直立と横書きが混ざった例が多い。清代では横書きの形が多くなってきた。石碑や壁等の銘文は直立の形が多いが、経文等は横の形が多い。

男性母音語に使う語末の q を女性母音語となる čičig という言葉で čičiq と使った例が ST で一つ見つかった。子音 s の語末の形を Aa では中世期の代表的な形となる「ㄣ」で書いている。ST では「ㄣ」の形で、valas_a という言葉を書いた例が一つ見つかった。これまで発見されていない新しい形「ㄣ」を使った例が jins_a、erikis_e という言葉で二つ発見された。

語頭の y、v、w、j を同形の Y で書いた例は多いが、ST では j を č で書いた例もある。現代モンゴル語で b となったサンスクリット語の子音 v を Y で書いた例は新発見となる。語中の子音 d を、D と T で交替させて書いた例もある。

連写規則については、現代モンゴル語で連写しているものを分けたり、その一方で分けているものを連写した例は多い。

格語尾や複数の接尾辞、再帰の接尾辞は、現代モンゴル語では全て主たる言葉と分写している。しかし、ここでは連写した例も多い。また、格語尾や再帰接尾辞、複数の接尾辞を連写した例もある。

2. 文法形態

Aa と ST のウイグル式モンゴル文字の文献は、中世期モンゴル語の文法的形態の特徴をよく現している。

① 数の範疇

Aa と ST の数の範疇は、中世期モンゴル語の特徴をよく現している。そして、中世モンゴル語の重要な資料である『元朝秘史』や、パスパ文字の文献資料と一致する特徴が多い。数の範疇に関していえば、単数と複数の対立があるが、単数にはそれを表す接尾辞や何らかの形態素はない。よって、数の範疇は複数接尾辞の形態素を指す。Aa と ST では -d、-s、-n、-nar/ner、-nuvud/nügüd、-ud/üd 等の複数表示の接尾辞がある。-n は現代モンゴル語では消失した。現代モンゴル語口語でよく使われる -ču:d/čü:d、-ču:l/čü:l、-du:s/dü:s 等は見つからない。-d と -s の使用範囲は現代モンゴル語のそれより広い。-nar は Aa では asuri nar という形で一回だけ現れる。-nuvud/nügüd、-ud/üd は、udi の形で ST に一度だけ見られた。-n は amitan、tovan、örgesün、jayavan という語で使われている。

複数の接尾辞の使用方法は、現代モンゴル語のそれよりも幅広い上に、関連する品詞も多かった。それらの複数の接尾辞が関連する品詞は名詞、形容詞、代名詞、副詞、時間および位置の名詞、動詞等である。しかし、『元朝秘史』、『薩迦格言』等に現れるような文末述語に付加される複数の形態は見当たらない。

形容詞に複数の接尾辞を付けると意味的には名詞となり、その名詞の複数を表示することがある。

中世期モンゴル語の形動詞の現在・未来時の三形態 -qu(/kü)、-qui(/küi)、-qun(/kün) は見当たらなかった。この三形態の -qu(/kü)、-qui(/küi) は、現在・未来時と単数を表して、-qun(/kün) は現在・未来時と複数を表すといわれることがあるが、Aa、ST に見られる -qu(/kü)、-qui(/küi) には数の対応をする形態は見られない。

② 格の範疇

格には主格、属格、対格、与格、位置格、奪格、造格、連合格など八つの形式がある。主格には格語尾がない。属格は-yin ~ -un/-ün ~ -u/-ü、対格は-i/yi、与格は-a/e ~ -da/de ~ -ta/te、位置格は-dur/dür ~ -tur/tür、奪格は-ača/eče ~ -dača/deče ~ -ča/če、造格は-bar/ber ~ -iyar/iyer、連合格は-luva/lüge である。現代モンゴル語の共同格-tai/tei を使用した例はない。又、現代モンゴル語の-du/dü も使用した例はなく、その代わりに-dur/dür ~ -tur/tür、-ta/te ~ -da/de ~ -a/e 等を用いている。与格の-a/e を造格の意味で使用した例は一つ見られた。属格語尾を対格語尾と交替させて使用する例は『altan tobči』(黄金史) とよく似ている。

③ 人称代名詞

中世期モンゴル語には、古い第三人称代名詞 a と i の跡を保存している例がある。中世期モンゴル語の第三人称代名詞の複数は a、単数は i である。中世期の文献では、その a と i は属格語尾と続け書きして表すことが多い。i は imayi、imadur という形で使用することも多い。しかし、Aa と ST では imayi、imadur は発見されなかった。anu と inu は見られる。

④ 態の特性

現代モンゴル語でほとんど使わない、あるいは全く使わなくなった受動態の-da/de、そして使役態の-u/ü と-ul/ül が使用されている。

⑤ 時の範疇

動詞の時の範疇を表示する語尾-u/ü ~ -ui/üi ~ -i、-mu/mü ~ -mui/müi、-yu/yü、-va/ge ~ -vai/gei、-luva/lüge、-lavai/legei、-lulai/lügei 等は、現代モンゴル語では使用しなくなったか、あるいはほとんど使用しなくなった。ただ、Aa と ST では-mu/mü ~ -mui/müi、-yu/yü はよく用いられている。

⑥ 法と人称範疇

動詞の法と人称範疇の語尾で、現代モンゴル語ではほとんど用いなくなった-su/sü ~ -suvai/sügei (第一人称、希望)、-dqun/dkün ~ -vdaq/gdekü ~ -vdaqui/gdeküi (第二人称、命令形、単・複数と男性・女性に関係する) といった語尾が使用された例がある。

⑦ 副動词语尾

副動詞の語尾-run/rün は、現代モンゴル語では使用しない。この語尾は中世期モンゴル語では予備副動詞と呼べるものである。例えば、saitur öber-ün tusa-ban ovurun である。これ以外に、この語尾は形容動詞の用法を持つこともある。しかし、その用例は Aa と ST では確認できなかった。

⑧ 性の範疇

Aa と ST において、性の範疇の接尾辞の対応状況は『元朝秘史』などと比べると、それほど厳密ではない。『元朝秘史』では男性を-tu/tü、女性を-tai/tei で表示することが多かったが、Aa と ST は表面的に見ると五冠仏の礼讃で-tu/tü を使用し、聖救度仏母二十一礼讃では-tai/tei を使用しても、üsügtü、belgetü というように-tu/tü を使用した例もいくつかのところで見つかる。

⑨ 語構成接尾辞

現代モンゴル語では使用しなくなった語形成接尾辞-ngvu/nggü が ST で使用が見られる。また、複数語尾を語形成接尾辞として使用した例もある。

⑩ 小詞、助詞

Aa と ST の小詞、助詞の使い方は、中世モンゴル語の特徴をよく現している。その中で最も注目されるのは *deki* という語である。*deki* は与格語尾 *-da/-de* と所有の接尾辞 *ki* が続け書きされて出来たものである。この *deki* が名詞 *genen* に接続されて出来たものが現代モンゴル語の副詞 *genedte* である。この例はこれまでに発見した中世期モンゴル語文献に見られる唯一の例である。この例を通して *genedte* の形成過程がよく理解できる。

3. 語彙特徴

語彙を品詞分類してみると名詞、代名詞、数詞、形容詞、方位名詞、動詞、形動詞、副動詞、副詞、助詞、後置詞、間投詞などがある。それらの品詞を音韻、綴り、語義、作用の四つの方面から現代モンゴル語、中世期の一般文献に見られる文章語、口語と比較して研究すれば、中世期の宗教文献語の特徴がよりいっそう明らかになるものと思われる。

第一種の文献に現れた語彙は 1058 語であった。ただ、今回はその膨大な語彙全てを本稿内で分析することはできない。従って、この項目に関しては、その中から一語 *ünen* を引き合いに出して観察し、分析を試みた。

論文審査の結果の要旨

バートル氏の博士論文「中世期宗教文献に見られるモンゴル語の研究」は、中世期宗教文献のうち、明宣徳六年京師木刻本經典集とアルジャイ洞窟銘文のモンゴル文に関する研究を中心とした大部な力作である。

本博士論文は、第一章 序論、第二章 明宣徳六年京師木刻本經典集のモンゴル文の研究、第三章 アルジャイ洞窟銘文のモンゴル文の比較研究、第四章 文法特徴、参考引用文献から構成される。

第一章 序論では、1. 論点、目的、理由、結論、2. 論文の題目の選択と意義、3. 題目について、4. モンゴル仏教の影響力とその貢献、5. モンゴルの宗教文献研究の状況、6. 明宣徳六年京師木刻本經典集の概況、7. アルジャイ洞窟銘文、8. アルジャイ洞窟銘文研究の状況、9. 本論文の研究概況などから成る。

第二章では明宣徳六年(1431)京師木刻本經典集の中に収録されているウイグル式モンゴル文字文献である五冠仏礼讚、聖救度仏母二十一種礼讚経などを読み、ラテン文字に転写し、翻字を行い、おおよその意味を日本語に翻訳して、語彙と宗教用語に注釈を施した。

第三章では、アルジャイ銘文の三十五仏への礼讚、二十一タラ菩薩への礼讚、十六羅漢への礼讚、優婆塞ダルマ・タラへの礼讚、四大天王への礼讚を、それぞれの対応する礼讚と比較した。また、現代モンゴル語の一般語彙では使用されない言葉やアルジャイ洞窟銘文では解釈できなかった部分、欠落している箇所などを中心に解釈した。

第四章では、明宣徳六年京師木刻本經典集とアルジャイ銘文のモンゴル文に見られる音韻、文字と綴り字の特徴、及び文法形態、語彙の特徴を簡潔に説明した。

氏の博士論文の最も特筆すべき点は、以下の3点にあると結論づけることができよう。すなわち、

1. 明宣徳六年(1431)京師木刻本經典集の2つの奥書と聖救度仏母二十一種礼讚経などに属する礼讚文の読解である。この經典は、15世紀に書かれたものであり、モンゴル

モンゴル仏教あるいはモンゴル仏典研究において、元朝滅亡後16世紀にチベット仏教が再導入されるまでの空白期間を埋める貴重な資料であり、その点に着目し、テキストの読解及び考察を試みた点は高く評価できる。

2. アルジャイ洞窟銘文の礼讃文を含めて文献的内容に関わる仏教的解説が整っており、これは宗教的文献をあくまでも宗教的観点から研究しようとする氏の首尾一貫した研究方針の表れとして高く評価できる。
3. 上述した宗教文献の読解に際し、方法論的にラテン文字による転写、翻字の手段を取ることによって、手堅く厳密にテキスト校訂を行った点が高く評価できる。

審査委員の中から、第四章の言語特徴をもっと詳細に記述すべきであった、とかモンゴル仏教成立に大きく関わったウイグル仏教やウイグル語の情報を盛り込む必要があった、とかあるいはサンスクリット起源の単語の誤記、アルジャイ洞窟銘文の書かれた時代考証、モンゴル語史の時代区分に関する見解、その他 モンゴル語の使役態-u/-üの存在、副動詞語尾-run/-rünの有無、性の範疇に関する解釈などの問題点も指摘されたが、氏がこれまで自らアルジャイ銘文研究グループの一員として調査に加わり、一連の先駆的な研究を行ってきたこと、氏の研究方法が極めて実証的で、十分説得力に富んでいること、また手堅く厳密にテキスト校訂を行っていること、さらに今後の研究に対する一定の方向性が明示されていることなどが高く評価される。

以上の諸点から本論文が、博士（言語文化学）の学位にふさわしいものである点について、審査委員全員の意見の一致を見た。